二〇二五年度入学試験

試験問題

国　語

注　意

一．開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。

二．受験番号を解答用紙の三か所に書き、答えはすべて**解答用紙**に書きなさい。

三．問題は 1 から 5 までで七ページにわたって印刷してあります。
なお、問題用紙のほかに別紙があり、表に別紙1、裏に別紙2が印刷されています。

四．終了のチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置きなさい。

セントヨゼフ女子学園高等学校

1

次の①～⑧の傍線部分について、漢字は読みをひらがなで書き、ひらがなは漢字に直しなさい。

① 夜が更ける。
② 穏やかな天気が続く。
③ 頻繁に訪れる。
④ 心の琴線に触れる。
⑤ あたりをさんさくする。
⑥ 作業のこうりつを上げる。
⑦ 税金をおさめる。
⑧ 荷物をあずける。

2

別紙1の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1　傍線部分(1)「経」と同じ部首を持つ漢字はどれか。次の行書で書かれたア～エの文字の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　イ　ウ　エ

問2　傍線部分(2)「まるで」の品詞名として適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　形容詞　イ　形容動詞　ウ　連体詞　エ　副詞

問3　本文中の□に当てはまる言葉はどれか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　通り過ぎていく　イ　大きな音を立てていた　ウ　ささやいている　エ　渦を巻いている

問4　傍線部分(3)「すぐさま女子高生のグループが割り込んできた」とあるが、「私」から見た女子高生たちはどのような存在か。適当でないものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　自分にはないものをすべて持ち合わせているあこがれの存在。
イ　何の迷いもなく自分の主張をする、「私」を圧倒してくる存在。
ウ　まだ保護が必要な立場の弱い子どもであると感じられる存在。
エ　周囲の目をまったく気にもしない、恐れを知らない存在。

問5　傍線部分(4)「バニラの日だけは、なぜかものわびしさが募った」とあるが、それはなぜか。その理由を六十字以内で説明しなさい。

3

別紙2の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1　傍線部分(1)「そうした違い」とあるが、本文の内容として適当でないものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　ドイツでは他の国に比べて、デザイン的な面が注目される傾向にある。
イ　フランスでは他の国に比べて、思想的な面に注目が集まる。
ウ　日本では他の国に比べて、芸術的な面に注目する人が多い。
エ　アメリカのニューヨーク以外の地域では他の国に比べて、実用的な面が注目される。

問2　文中の（　①　）～（　③　）に当てはまる言葉をそれぞれ次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　すると　　イ　つまり　　ウ　なぜなら　　エ　しかし

問3　文中の［A］・［B］に当てはまる言葉をそれぞれ次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　石の上にも三年　　イ　灯台もと暗し　　ウ　井の中の蛙（かわず）　　エ　馬の耳に念仏

問4　傍線部分(2)「これは少々具合が悪い言葉といえます」とあるが、なぜ具合が悪いのか。六十字以内で説明しなさい。

問5　本文についての説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　筆者は日本人の多くが、日本の文化について説明できないことに問題意識を持ち、この問題を解決するには茶道を学ぶことが効果的だと考えている。
イ　筆者は海外での豊富な生活経験を生かして、最近では芸術や思想的なものとして海外でも関心の高い茶道を、ビジネスとして定着させようとしている。
ウ　筆者は茶道について説明する際、相手の関心に応じて強調する内容や意識を変えることで、聞いている側の茶道への理解を促している。
エ　筆者は茶道に関わる者としての立場から、自身の具体的な体験に基づいて茶道について説明し、読者に茶道への理解を深めてもらおうとしている。

4

次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

前※大和守時賢が墓所は、※長谷といふ所にあり。そこの留守する男、※くくりをかけて鹿を取りけるほどに、ある日大鹿かかりたりける。この男が(1)思ふやう、くくりにかけて※取りたらん、※念なし、射殺したりと言ひて、弓の上手の※由、人に※聞かせんと思ひて、くくりにかかりたる鹿に向きて、※大雁股を※はげて射たりけるほどに、その矢□には当たらずして、くくりにかけたりける※かづらに当たりければ、かづら射切られて、鹿は(2)事故なく走り逃げて行きにけり。この男(3)かしらがきをすれども、さらに益なし。

（『古今著聞集』による）

注（※）　大和守＝大和国（現在の奈良県）を治める長官　長谷＝現在の奈良県桜井市初瀬あたり
くくり＝鳥獣などをくくって捕らえる罠　取りたらん＝取ることは　念なし＝たやすいことだ　由＝～ということ
聞かせん＝聞かせよう　大雁股＝矢じりが股を開いたような形になった矢　はげて＝つがえて　かづら＝つる草

問1　傍線部分(1)「思ふやう」について、男が思った内容にあたる部分を本文中から抜き出し、終わりの四字を書きなさい。

問2　□に当てはまる言葉を本文中から漢字一字で抜き出して書きなさい。

問3　傍線部分(2)「事故なく」について、次の1．2．に答えなさい。

1．すべてひらがなの現代かなづかいに改めなさい。

2．本文中での意味を次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　無事に　イ　理由もなく　ウ　あてもなく　エ　安心して

問４　傍線部分(3)「かしらがき」は「頭をかく」という意味だが、この時の男の気持ちとして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　寂しい気持ち　　イ　悔しい気持ち　　ウ　誇らしい気持ち　　エ　楽しい気持ち

問５　この文章の内容として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　男は罠にかからなかった鹿に腹を立てて弓で射殺してしまった。

イ　男は罠にかかった鹿を愛おしく思って一緒に暮らすことにした。

ウ　男は自慢しようとしてせっかく捕らえた鹿を逃がしてしまった。

エ　男は捕らえた鹿がかわいそうになって思わず逃がしてしまった。

5 あとの【資料1】、【資料2】は、三重県が実施した「平成28年社会生活基本調査」のボランティア活動についての結果をまとめたものである。これらを見て、次の各問いに答えなさい。

問1 【資料1】から読み取れることを、次の文章にまとめた。（ ① ）～（ ④ ）に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、あとのア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

三重県で過去一年間に何らかの「ボランティア活動」を行った人の中で、一〇歳以上人口に占める割合（行動者率）は二九・〇%となっている。

行動者率を男女別にみると、男性は二九・八%、女性は二八・二%で（ ① ）となっていることがわかる。また、行動者率を年齢階級別にみると、（ ② ）の年齢階級が最も高く、一方（ ③ ）の年齢階級が最も低くなっている。

これを全国と比較すると、三重県は総数で三・〇ポイント（ ④ ）、男性で四・八ポイント（ ④ ）、女性で一・三ポイント（ ④ ）なっている。

ア ① 男性のほうが高い割合 ② 六五～七四歳 ③ 二五～三四歳 ④ 低く
イ ① 男性のほうが高い割合 ② 三五～四四歳 ③ 一五～二四歳 ④ 高く
ウ ① 男女ほぼ同割合 ② 六五～七四歳 ③ 一五～二四歳 ④ 低く
エ ① 男女ほぼ同割合 ② 三五～四四歳 ③ 二五～三四歳 ④ 高く

問2 【資料2】から読み取れることについて最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 三重県では「子供を対象にした活動」に取り組んでいる割合は、最も高いわけではないが比較的高く、全国の割合も上回っている。
イ 三重県では「まちづくりのための活動」に取り組んでいる割合は、他の項目に比べ一番高く、全国の割合よりも大きく上回っている。
ウ 三重県では「安全な生活のための活動」に取り組んでいる割合は、「高齢者を対象とした活動」の二倍以上となっている。
エ 三重県では「国際協力に関係した活動」に取り組んでいる割合は低いが、全国の割合に比べると高いものになっている。

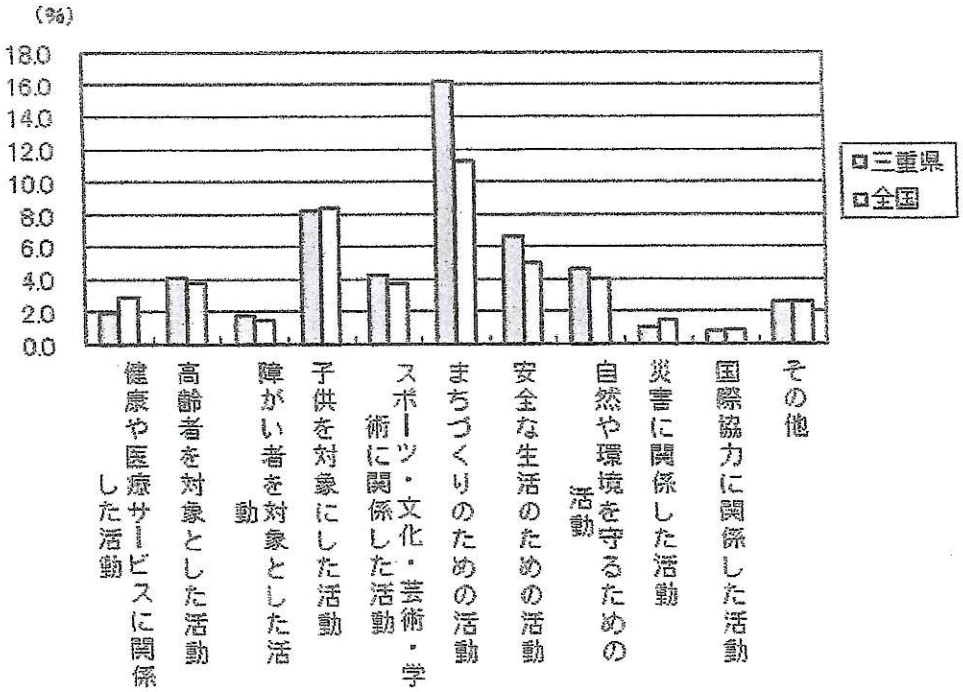
問３　中学生の花子さんは【資料２】を見て「災害に関係した活動」に取り組む割合が低いことに注目し、自分にはどのような取り組みができるのかを考えた。災害に関係したボランティア活動としてあなたにどのようなことができるかを、あとの〔注意〕にしたがって書きなさい。

〔注意〕
① 題名は書かずに本文から書き出しなさい。
② 「災害に関係した活動」について具体的な取り組みを一つ取り挙げ、あなたの考えを書きなさい。
③ 原稿用紙の正しい使い方にしたがい、全体を百六十字以上二百字以内にまとめなさい。

【資料１】年齢階級別「ボランティア活動」の行動者率　（%）

	三重県			全国		
	総数	男	女	総数	男	女
総数	29.0	29.8	28.2	26.0	25.0	26.9
10～14歳	25.1	28.1	21.9	26.5	25.2	27.9
15～24歳	19.6	14.7	24.8	20.9	18.5	23.3
25～34歳	15.4	18.9	11.7	17.4	17.0	17.9
35～44歳	39.3	34.9	43.9	30.2	24.2	36.4
45～54歳	33.4	33.3	33.5	30.5	27.6	33.3
55～64歳	32.7	37.1	28.4	28.9	28.9	28.9
65～74歳	35.9	37.5	34.5	29.9	31.3	28.7

【資料２】「ボランティア活動」の種類別行動者率



これで問題は終わりです。

別紙１（本文は、設問の都合で省略した箇所があります。）

※hを手放してから十七年が(1)経った。しばらくは呆然とし、家に閉じこもっていたが、紹介してくれる人があって動物園の売店で働くようになった。

[Zoo Paradise] は正面ゲートを入り、フラミンゴ舎と孔雀舎の間のスロープを上った右手にある。そこは木陰にベンチを並べただけの、ちょっとした休憩スペースになっていて、ほかにも軽食スタンドやコインロッカーや授乳室が立ち並んでいた。すぐ裏手側は、象の寝室だった。

楽園と看板を掲げるほどには、店内は華やかではない。天井は黒ずみ、空調は始終耳障りな音を立て、従業員の制服は野暮ったい。ぬいぐるみ、Tシャツ、ワッペン、下敷き、メモ用紙、積み木、クッキー、キャンディー、ジグソーパズル、雨合羽……。商品はどれもこれもが安物で、お座なりだった。何かしら動物の形をしていたり、絵が載っていたりする品々を寄せ集め、とりあえず並べてある。そんな風情が隠しようもなく漂っていた。

けれど子供たちは、お土産に何か一つでも買ってもらえれば、この世で自分ほど幸福な者はいない、という表情を浮かべた。ぬいぐるみの山に手を突っ込み、ベルベットの長い舌がはみ出したカメレオンや、大きすぎるガラスの目玉が指紋でベタベタになったスローロリスや、下の方で押し潰されて鼻先が曲がったツチブタを引っ張り出してきた。すぐに抱いて持って帰れるよう、私は値札を切り離し、埃をはたき、「はい、どうぞ」と言って手渡してやった。すると彼らは(2)まるで、目の前にいるおばさんがぬいぐるみを作った本人であるかのような、この人こそが楽園の女王様であるかのような目で、私を見つめるのだった。

それでも次の瞬間にはもう、子供たちは私に背を向けていた。ぬいぐるみをしっかりと脇に抱え、もう片方の手で母親と手をつなぎ、こちらを振り返りもしないまま遠ざかっていった。

動物園は夕方五時半に閉園する。（中略）

一日の売り上げを計算し、お金を金庫に仕舞い、陳列棚にカバーをかぶせている私の足元に、二頭の発する気配とも振動とも言えない微かな合図が伝わってくる。彼女たちは一日の終わりを悟り、何の未練も残さず昼間の光に背を向け、寝床を目指す。お互い相手を無視するでもなく、かと言って親しく体をすり寄せるでもなく、尻尾と鼻が触れそうで触れ合わないぎりぎりの間隔を保っている。バードケージから熱帯の鳥たちのけたたましい鳴き声が聞こえてくるが、象舎の空気が乱されることはない。シカゴが一度、耳をパタリとさせるだけだ。

広い動物園で、光に別れを告げる彼女たちの合図を感じ取っているのは、自分一人だ。他の誰でもない自分だけのために、すぐそこまで闇が迫っているのを知らせてくれているのだ、と私は思う。

どれほどの重みも無言で受け止める、足裏の深々とした柔らかさについて私は考える。そのざらりとした手触りを掌によみがえらせる。二頭の静けさに身を任せていれば、長い夜も安全だという気持になれる。

ラトビアは一番奥、シカゴは二つ手前の寝室に入ってゆく。そこは既に寝床が整えられている。ラトビアは壁にもたれかかって、シカゴは横になり脚を投げ出して眠りにつく。

「さあ……」

私はつぶやく。

「お利口に、おやすみなさい」

hには言えない「おやすみ」の言葉を、代わりに象に向かってささやきかける。しかしその一言は結局どこにも行き着けないまま、私の耳元で[　　]。

二頭が動かなくなったのを確かめてから、私は楽園の鍵を閉め、スロープを下り、動物園を後にする。

仕事の帰り道、私は駅前のアイスクリーム屋に立ち寄る。そこで一個、アイスクリームを買って食べるのが、ほとんど唯一の楽しみだった。店のガラスケースには、縦横四×六、合わせて二十四種類のアイスクリームが並んでいた。バニラやチョコレート、ストロベリーといった定番の他、季節ごとに次々と味が入れ代わった。店は繁盛していた。ケースの前で少しでも思案していると、(3)すぐさま女子高生のグループが割り込んできた。学生鞄や運動着の入ったバッグをぐいぐい押し込めてスペースを確保し、「わたし、バナナクリームのラージサイズ」「キャラメルとサイダー、ダブルにする」「マンゴーシャーベット、カップでお願い」といった調子で次々注文を繰り出し、その間もずっとお喋りをし続けていた。

気がつくと私は片隅に追いやられていた。ためらいもせず高らかに自分の味を主張する彼女たちを、圧倒される思いで眺めるしかなかった。

「メイプルマロンを、一つ……」

ようやく決心を固め、そう口に出すが、女子高生たちの前で私の声はため息ほどの勢いもなく、店員の耳には届かなかった。誰もが私のことを、単なる付き添いか、間違えて紛れ込んでしまった人だと思っているようだった。

気づいてもらえるまで、私は大人しく待った。待っている間に、いや、やっぱりラムレーズンの方がいいだろうかと迷いがぶり返すのもしばしばだった。各々望みの種類を手に入れた彼女たちは早速それを舐めながら、私には目もくれず、店内の奥へ移動していった。彼女たちの首筋は固まりきらないクリームのように危うげで、まだどこかに赤ん坊の頃の甘い匂いを残していた。それが本当に首筋から漂ってくるのか、あるいは単にアイスクリームのせいなのか、私には区別がつかなかった。いよいよ順番が巡ってきた時、自分がどの種類を頼めばいいのか訳が分からなくなっていた。

ある時私は、ガラスケースの一番上左角からスタートし、右横へ毎日順番に一つずつ注文しようと決めた。そうすればもう迷う必要はなく、しかもすべての種類をまんべんなく食べることができるのだった。

一日の終わりに食べる一個のアイスクリームは、何の代わり映えもしない毎日に彩りを添える、ささやかな習慣だった。台風のせいでぬいぐるみが一つも売れなかったり、気難しい客に三時間も怒られ続けたり、商品の入った段ボールを持ち上げて腰を痛めたりした日でも、カシスシャーベットをコーンにのせてもらえば、そのルビー色が多少なりとも心を慰めてくれた。レモンマシュマロの柔らかさは安堵を、アーモンドのカリカリと砕ける音は励ましをもたらした。

ただ一つ(4)バニラの日だけは、なぜかものわびしさが募った。季節が移り変わろうと、どんな流行が訪れようと、バニラは決して姿を消すことなく、常に二十四種類の一角に場所を確保していた。にもかかわらず、それを注文している人に一度も出会ったことがなかった。他の二十三種が華やかな色を競い合い、ナッツやチョコチップやマーブル模様で身を飾り立てているのに比べ、バニラはあまりにも素っ気なかった。ガラスケースの中でそこだけが取り残され、孤立しているように見えた。

「あの……バニラを……」

バニラの日は、普段にも増して大きな声が出せなかった。

座るのはできるだけ女子高生から離れた片隅の席と心掛けていたが、それでも混雑がひどくなると彼女たちはこちらに迫ってきて、私の目の前にスポーツバッグを置く者もあった。私は肩をすぼめ、誰とも視線がぶつからない床の一点を見つめ、ひたすらアイスクリームだけに専念しようと努めた。彼女たちは喋り続けながら、私のよりずっと大きなサイズのアイスクリームに果敢に挑んでいた。遠慮なく舌をのばし、それを自在に操りながらクリームをすくい取り、バリバリ音を立ててコーンを砕いた。口の周りが汚れても、スカートの裾から太ももが覗いて見えてもお構いなしだった。怖いものなど何もないようだった。

私はよりいっそう背中を小さく丸め、臆病な小鳥が木の実をついばむようにして口をすぼめ、コーンの縁を舐めていった。しかしどんなに用心していても、目の前のバッグを無視することはできなかった。中に入っているのは部活動用のトレーニングウェアだろうか、それとも体育の時間に着る体操服とブルマーだろうか。バッグは汗と埃を吸い込み、くたびれ果ててぐったりしていた。大威張りでアイスクリームを食べる彼女たちも、実はまだ庇護が必要なか弱い者であるという事実を証明しているかのようなバッグだった。つい手に取って両腕で持ち上げ、胸に抱き寄せてみたくなる重さと大きさを持っていた。別れた時のhも、丁度これくらいの……

その思いがこみ上げてきた途端、溶けたアイスクリームが指を垂れ、スカートの上に落ちた。慌てて紙ナプキンを取ろうとした私の手が、バッグの持ち主らしい少女の背中に触れたが、彼女はわずかに振り返り、不審な表情を一瞬浮かべただけですぐにまたお喋りに戻った。拭いても拭いてもスカートの染みは消えなかった。

ガラス張りになった向こう側の歩道を、人々が大勢通り過ぎていった。ケースの前には行列ができ、店員は忙しく立ち働いていた。相変わらず誰一人、私に注意を払う者はいなかった。誰からもバニラのように忘れ去られていた。

（小川洋子著「いつも彼らはどこかに」より）

注（※）　h…「私」の子供。今は共に生活していない。

別紙2

「お茶にハニーは入れないのか？」

ところが、アメリカでもニューヨークを一歩出ると、「お茶はヘルシーな飲み物だそうだが、ダイエットにいいのか？」とか、「ハニー（はちみつ）やミルクは入れないのか？」といったかなり実用的な話になりがちです。

フランスに行きますと、こちらは芸術の都ですから、さすがにニューヨークさながらといいますか、ときにはそれ以上に思想的な面でのお茶という部分に興味を示す人が多いのです。でも、おもしろいなと思ったのは、アメリカだとニューヨークに限らず「何か質問はありますか？」というと、つぎつぎ手が挙がるのですが、意外なことにフランスではほとんどそういったことがなく、ちょっと拍子抜けしていると、あとからそーっと寄ってきて個人的にボソボソッと訊いてくるというケースがけっこう多いのです。こういうところは、ちょっと日本に似ていておもしろいなと思いました。

そしてドイツは、物作りに定評のある国らしく、私がデザインした茶机に対しての興味が高く、具体的に「どこで買えるのか」といった質問もされました。やはりデザインというものに対して意識の高い国だという印象です。

(1)そうした違いがあるからといって、ことさら外国向けに講演の内容を変えるといったことは、私はしていません。

もちろん、傾向と対策として、ニューヨークやフランスでは文化的な面をクローズアップするとか、ドイツではデザインの部分を多めに語ってみたり、といった工夫はしますが、基本的に、日本人に向かって話すのと外国人に向かって話すのと、私自身の意識はほとんど変わっていません。

変えないのではなく、変える必要がない、と思っているからです。

（　①　）、海外のほとんどの方と同様に、現代の日本人にとっても、もはや茶の湯というのは異文化だと私は思っているからです。

未知なるものとしての日本

かつては外国に行くということは、出会うものすべてが新鮮、という時代がありました。けれどこれだけ情報が氾濫している現代では、たいがいのことは珍しくなくなっています。実際の経験か、バーチャルかはともかく、「未知」と出会うことのほうがむしろ難しいくらいです。

私自身、外国に行くことで新しい何かを発見するということはあまりなくなったように思います。むしろ、お茶とか日本といったものを客観的に見て、その位置づけを確認するといったことのほうが多かった気がします。

よく、留学や海外赴任をした人が、パーティなどで日本の文化について尋ねられて何も答えられずに困ったとか、逆に外国人から歌舞伎について教えられた、といった話がありますが、まさにその通りで、いまや多くの日本人にとってもっとも「未知なるもの」は、日本なのだと思います。

外国に、特にニューヨークのような街では、そこに暮らす日本人も、自分たちのアイデンティティーが試されますから、いやがおうでも意識も高まるし、貪欲にもなる。日本文化について尋ねられて、何も知らない自分、何も答えられない自分に愕然として、自覚的にならざるを得ないのです。日本人である自分の拠り所はなにか、ということをすごく求めているように思います。

無頓着なのは、むしろ日本に暮らしている日本人ではないでしょうか。禅に「看脚下」という言葉があって、これは「己の足元を見よ！」ということです。［　A　］、というのと、同じですね。日本にいる日本人ほど、自分自身の足元が見えていない。

そういう、内側に立っていては見えなかったものが、外側から眺めることではじめてはっきりと見えるようになる。この構図は、あらゆる内側と外側の関係にいえることだと思います。組織であれ、グループであれ、あまりにそのなかの空気や温度、常識に慣れすぎてしまうと、自分ではわかっているつもりでも、いつのまにかその世界の内側しか見えなくなっていて、それがすべてと思うようになってしまう。まさに［　B　］です。

慣れた場所は居心地がよく、慣れない場所は不便だったり不安だったりもするものです。けれど自分のいる位置をしっかりと見極めようと思ったなら、リスクをおそれずに、いまいる世界の外側に立ってみることです。そうしなければ、本当のところは何も見えてこないのだと思います。

そういう意味で、ニューヨークでの一年間は、茶についてあらためて考える絶好の時間となりました。伝統の意味であったり自分自身のルーツであったり、己の立ち位置を俯瞰から見渡すような、実に面白く貴重な経験となったのです。

グローバリゼーションと呼ばれる昨今、読者の方の中にも、海外に出て、日本文化をあらためて見つめ直したいという気持ちになったことのある方がいるのではないでしょうか。異文化を背景にもった人々と、ビジネスの場面や、親しくなった席で、日本について、さらには最近では海外でも関心の高い茶の湯のことなどを訊かれることもあるでしょう。

そんなとき知っておいて欲しい、お茶と日本文化の背景にある考え方や歴史をここではご説明します。

英語で「茶の湯」を説明する

茶の湯というものを英語で表現するときに、もっとも一般的な言葉が「ティー・セレモニー」です。たしかに、お茶というものの性格の一端を語っている言葉ではありますが、これはあくまでも外側から見たお茶のイメージなのだと思います。外側というのは、外国の方だけでなく、実は一般的な日本人も同じなのではないかと思います。

ティー・セレモニーは、直訳すると「茶の儀式」ですが、私のようにお茶をする側の人間からしてみると、(2)これは少々具合が悪い言葉といえます。

以前、インターネットで「茶会、イメージ」と入力してみたことがあります。（　②　）、着物を着た女性の方々が畏まって並んで正座して、とても緊張した空気がみなぎっている、といった画像にヒットしました。おおよそ普段の生活とはかけ離れた、パッと見、まさに「儀式」のような場。お茶の世界の外側から見たお茶というのは、一般的にはそういうイメージなのだと思います。

では、セレモニー以外に、ほかに英語でどういう語彙があるかというと、つぎに思いつくのが「ウェイ・オブ・ティー」です。こちらは茶道という言葉の、いってみれば直訳で、これも英語ではよく使われています。しかし、この「ウェイ・オブ・ティー」も、私からすると少し特殊な感じがしてしまう。思想的な意味合いが強くなってしまうように思えるのです。「ティー・セレモニー」と「ウェイ・オブ・ティー」。いずれも、身近なものから遠ざかったイメージです。ある意味、とても深遠な雰囲気がただよい、それゆえにいささかとっつきにくいものに感じられてしまうのではないでしょうか。

また、別の言葉で「ティー・ギャザリング」というものもあります。（　③　）、ギャザリングというのはどちらかというと「寄り合い」といったニュアンスで「集まる」ことに主眼が置かれます。茶の寄り合い、茶の集まり。お茶をすることよりはむしろ集まることに重きが置かれてしまっている感じがして、軽い印象です。

さらに最近私が見かけたなかに「アート・オブ・ティー」という言葉があります。もちろん、お茶というのは芸術や芸道とのかかわりも非常に深く、お茶そのものがお点前という身体を用いた一種のパフォーマンスを伴ったアートである、と定義することもできます。お茶に使う道具も、美術品として価値の高いものもあります。さらに、それらを組み合わせて展開してみせるという行為自体をひとつの美術作品というかアートの行動であるというふうに考えることもできるわけですから、「アート・オブ・ティー」という言葉にも、なるほどなと思わせるものはあります。

ただ、それらを並べてみると、茶の儀式、茶の道、茶の寄り合い、茶の芸術といったそれぞれの言葉はどれも、お茶のある一面を語っているにすぎず、どれかひとつであったり、いずれかが強調されたりというなかでは、やはりお茶の性格というものを十全に語り尽くしてはいないと思います。

そうなると結局、「チャドウ」「サドウ」あるいは「チャノユ」というそのままの言葉で語るのが、もっとも本来の意味を伝えるにふさわしいのではないか、と考えるのです。剣道とか柔道が、いま普通に「ケンドウ」、「ジュウドウ」として英語の中で使われているように、です。同じように、「チャノユ」といって外国人の方にも「ああ」と認識してもらえるように、茶の世界の内側にいる私たち自身もいっそうの努力をしていく必要があると思います。

（千宗屋著「もしも利休があなたを招いたら
―茶の湯に学ぶ〝逆説〟のもてなし」より）